

審査の結果の要旨

氏名 淀川 裕美

本論文は、乳児期から幼児期への移行期にあたる2歳児クラスにおける集団保育場面での子ども同士の対話のあり方の時期的変化に関して、場面間の相違および個人の対話への参加の仕方の相違を研究分析した論文である。論文は5部9章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、2-3歳時期の対話に関する先行研究を整理した上で研究課題を提示し、3者以上の対話の特徴と変化を描出する分析視点として、対話への参入、対話の維持発展、場の固有性、個人の参加方法の4視点を導出している。第2章では、自然観察法に基づき、対話機能と伝達方向から「伝える、確認する、模倣する」事例を取り上げた事例分析を行うという研究方法が論じられる。

第Ⅱ部では、集団での対話の成立に関し、第3章では、対話への参入者数や応答連鎖の分析から、第4章では身体位置・媒介物の有無、話題の特徴から、分析を行っている。その結果、食事場面の方が散歩場面よりも多人数でより長い応答連鎖が生じやすいという場面間差、前期・中期では媒介物を必要とする対話が多いのに対し、後期には必要としない対話の成立が増加すること、また当該時期の対話の特徴として、他児の情報を確認する事例より、自らに関する情報を伝える対話事例がより多いという特徴を明らかにしている。

第Ⅲ部では、対話の参入と維持発展を検討している。5章では、模倣事例を分析し、食事場面では他児の発話模倣から他児とは異なる表現を使用し話題を展開するように変化するのに対し、散歩場面では非模倣から模倣への変化がみられることを示している。6章では、確認する事例を分析し、話題ならびに宛先の広がりに関し、食事場面では抽象的話題での二者間対話から具体的話題での三者間の対話への広がりが見られるのに対し、散歩場面では、具体的な物の話題から他児の心情等に言及する話題へと変化がみられることを明らかにしている。第7章では、伝える事例を分析し、食事・散歩両場面共、後期からは互いの応答を関連させ対話を維持する様子が見られること、食事場面では主張の終助詞「よ」の使用が前期に多く、中・後期では終助詞や間投助詞「ね」の使用が増加し、宛先も三者以上に広がることを明らかにしている。第Ⅳ部8章では、個人の参加のあり方を3名の子どもに焦点をあてて分析し、前期では話題の共有にとどまるのに対し、後期になると共有からさらに展開が可能となるという共通性、時期とともに多様な応答方法ができる傾向がみられること、ただし他児の関心を引く方法や他児の応答を引き出す方法には個人差がみられることを示している。

第Ⅴ部では、上記、事例分析研究を踏まえて総合考察を行い、発達研究、言語学、保育学において本研究がもつ意義と課題を整理して論じている。

本論文は、自然観察による保育場面の精緻な事例記述をもとにその体系化をはかり、2-3歳時期の集団での対話の特徴を明らかにした学術研究論文として独自性が高く、保育学領域の研究に新たな視座を提示した論文であると高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。